
Your heart is marine blue

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y o u r h e a r t i s m a r i n e b l u e

【Nコード】

N 8 1 7 4 V

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

ゴールデンウィーク明けの日曜日に、高校三年生の「咲田遼子」は「大村俊朗」という『おじさん』と出逢った。出逢ってから夏が終わるまでを時系列で追った、遼子と俊朗の恋愛物語。アツサリとした流れだけれど、意外な方向へとストーリーは展開します。

01 Never Ending Summer (前書き)

夏をテーマに思いつ切り、おじさんの妄想を爆発させてみました。章ごとのタイトルを杉山清貴の楽曲タイトルでオマージュしながら、爽やかだけど少しシニールな、女子とおじさんの恋愛を綴ってみました。

【第五回「夏祭り」競作小説企画・参加作品】

01 Never Ending Summer

「君、起きなさい」

低い男の人の声がして、大きくて節くれだった手の平があたしの肩を揺り動かしたようだった。その刺激であたしは、机に突っ伏していた顔を上げた。

「ようやく起きましたね」

臺が立った女の人の声があたしの後ろから聞こえてきた。

「お手数をお掛けしました」

女の人に頭を下げながら、先ほどの低い男の声がそう発言していた。

「グッスリ寝ていたようだね。大丈夫かい？」

先程よりずい分優しくなったその男の声は、あたしにそう語り掛けた。あたしは無言のまま、まるで幼児のようにコクンと首を縦に振ったのだった。

全くひどい様子のあたしだった。あたしの目はまだ半分閉じていて、顔と腕にはあたしの髪の毛が挟まれていたらしく、髪の毛の跡が顔と腕にまるでハンコを押したように赤く写し取られていた。そして髪の毛はボサボサで、腕と机には、ヨダレの跡がくつきりと残っていた。あたしは、慌てて髪の毛を手櫛で整え、顔に手を当ててから唇のヨダレを拭った。

「もう図書館は閉館だ。荷物をまとめて外に出よう」

男の人の声は、かなり優しくあたしに話しかけてくれていた。

あたしは自分の荷物を片付けながら図書室の閲覧室を見回した。閲覧室には、あたしとその男の人しか居なかった。あとは図書館司書の女の人だけ。先ほどの女の声は司書の人の声だったんだと納得した。

閲覧室は皓々と照明が点いていて、窓は既に真っ黒に塗り潰されていた。あたしはゆっくりと左腕の時計を見ると、時刻はもうすぐ

十九時になろうとしていた。

「もう、こんな時間なんだ」

あたしはそう呟くと、男の人はゆっくりうなずいた。

「ちよつと遅い時間になつちやつたけど、家の人は心配してないかい？」

あたしは”家族”という言葉に抵抗を感じた。

あたしの家族はバラバラだ。父親は外に女を作つてたまにしか帰らない。その癖、家ではやたらと威張り腐っている。その配偶者である母親も自分の夫に女が居ることを薄々感じているから、母親の向かう方向は常にあたしだ。何かと言うとあたしに引つ掛けてガミガミと言ってくる。そんな両親だから、家族というヤツには少々うんざりしているあたしだった。

だから、男の人にそう訊かれてもすぐに返答は出来なつた。

「いいんだよ、答えたくないなら答えなくても」

男の人は優しくそう言った。その優しさがちよつと嬉しくて、あたしは男の人の顔を見た。

おじさんだった。

でも、お腹の出た、七三分けの、匂いが酷い、Ｙシャツの衿が黄ばんでいそうな、サラリーマン風のおじさんではなかった。

髪型は二ブロックの、ハチ下を刈り上げハチ上はショートレイヤースタイルで、顔は四角で、眉は濃くて、鼻は大きくて、唇は薄くて幅広かった。そして肌はあざ黒かった。

服装はジーンズに白Ｔシャツ、その上にブラックの綿のジャケツトを羽織っていた。それでも、少々お腹が出気味だったかな。

「とりあえず、図書館に迷惑が掛かるから外に出ようか」

あたしは、そのおじさんに促されて、階段を降りて図書館の玄関までの何十メートルかを並んで歩いた。その間に、あたしはおじさんと少し会話をした。

「高校生なんだ。おじさん、大学生かと思ってたよ」

「家からここまで電車で二駅なんだ。ちよつと遠いじゃない？」

「おじさんにも娘がいたなあ、確か」

「へー、一人っ子なんだ」

そんなくだらない話をしていると図書館の玄関のところによってきて、自動ドアが開いて外へ一歩踏み出した。

「お腹、減ってるよね？」

おじさんは、あたしの顔を見ながらそう言った。

「おじさんも腹減ってるんだけど。ご飯、一緒に食べるかい？」

あたしはゆっくりとおじさんの方を見た。

「いや、変な意味じゃないし、変なことはしないよ。ただ……ご飯食べたくなかなあと思って」

おじさんは、変な誤解をされないようにと必死で説明と言いつつ釈明をあたしにしていた。その姿を見て、あたしはプツと吹いてしまった。

「……あ、メツチャ格好悪かったなあ」

そう言って、おじさんは急にシュンと肩を落とした。そして、おじさんは背を向けてトボトボと歩き出した。

「ごめんよ、余計なことを言って。ここでさよならだ。気を付けて帰るんだよ」

おじさんはあたしから去りながらボソボソと喋り続けていた。

あたしはふと思った。

このまま帰っても、面白くない家が待っているだけだ。父親は居ないし、母親はあたしが帰ってくるのを手薬煉引いて待っている。あたしをガミガミと叱り、あたしに媚びへつらい、そしてあたしのご機嫌を取る母親が待っているだけだ。

気がついたら、あたしはニツコリと笑って、おじさんの背中に向かって声を掛けていた。

「いいわよー。ご飯、一緒に食べてもー」

すると、おじさんはすぐに振り向いた。

「ホントに？」

おじさんはちょっと嬉しそうにあたしに訊くので、あたしは大き

くうなずいておじさんに駆け寄った。

「あたし、ラーメンが食べたいわ」

あたしはおじさんの腕にしがみ付いた。するとおじさんは、あたしの手を払いのけてから言った。

「ダメだよ、そんなことしちゃ。いいんだよ、気を使わなくても。」

おじさんは今日の晩ご飯を貴女と食べたいと思ったただけなんだから」

おじさんは、あたしを伴いながら図書館の駐車場に向った。そこにはおじさんの黒のワゴン車が停めてあった。

おじさんはオートロックを解除してドアを開けた。

「助手席に乗って。どこのラーメンにする？」

おじさんは妙に明るかった。あたしもその明るさに笑顔が出てしまっ

「うーんとね。餃子が美味しいラーメン屋さん、知ってるんだ」

あたしは、おじさんの娘の友達のようにはいしゃいでいた。

「じゃあ、そこに行こう。案内してくれる？ ……えーっと……」

あたしはおじさんが何が言いたいのか、察知出来た。

「遼子よ、咲田 遼子。遼子って呼んでよ」

おじさんはGJサインを左手で出してから言った。

「OK、遼子ちゃん。案内をよろしく」

あたしも右手でGJサインを出して、それに応えた。

「OK、あたしに任して！」

おじさんのワゴン車は、スルスルと図書館の駐車場から動き出したのだった。

その後、あたしの案内で行ったラーメン屋さんで、あたしは餃子二人前とチャーハンを、おじさんは餃子三人前と麻婆豆腐を食べた。ラーメンが食べたかったはずなのに、あたしもおじさんも結局、ラーメンを食べなかった。

食べている間、あたしは学校のことや友達のことを、おじさんは仕事のことや取引先の悪口を、それぞれに喋り、お互いにうなずいただけだった。

そして、おじさんが会計を済ませてから店を出て、おじさんはあたしの家に近くまで送ってくれて、数百メートル手前で車から降りたのだった。

「おじさん、今日はありがとう」

あたしはおじさんにニツコリと笑った。一応、社交辞令で。

「おじさんこそ、ありがとう。ラーメン、美味しかったよ」

おじさんにはこやかにあたしにそう言ったが、あたしは容赦なく突っ込みを入れた。

「おじさん、ラーメンなんか食べてないじゃない！」

おじさんは、カツカツカツと笑って言った。

「そういう元気な遼子ちゃんが一番可愛いよ」

あたしはちよつとふくれた。

「もう、知らない！ それじゃ、さよならっ！」

あたしはドアをボタンと閉めて、走り去った。おじさんはウインドウを開けて大声で怒鳴った。

「今日はありがとうね。楽しかったよ」

あたしはその声で振り返ってから、手を大きく振った。おじさんはクラクションをブツと鳴らしてから発進して左折した。おじさんの黒のワゴン車は、町角に消えていった。

02 You are in the rain

ゴールデンウィーク明けの最初の日曜日に、図書館で出逢ったおじさん。

結局、あたしはおじさんの名前を知らない。

ただ、黒のワゴン車に乗っていることだけは知らない。

おじさんは、あたしの名前を知っているけど。

「咲田 遼子」ってあたしは告げただ。

だけど、それだけ。

携帯電話の番号も住所も何も知らない。

連絡を取る術は何も無い。

だけど、あたしは楽しかった。

あたしをちゃんと見てくれていた。

あたしの話を聞いてくれた。

だからあたしは楽しかった。

家に帰ることに比べれば。

おじさん、どうしているかな？

おじさん、何処にいるのかな？

教室の窓際で窓の外の五月晴れを見ながら、あたしはそんなことを考えていた。

「どうした、遼子。最近ボーっとして」

突然、親友の茉美があたしの後ろからあたしの右肩に手を掛けた。あたしはハッとして振り向いた。

「茉美、脅かさないでよ」

茉美の横には、もう一人の親友の恵梨佳がいた。

「ホント、最近の遼子はおかしいわ。時々遠くを見たりボーっしたりしてね。私が思うにわね、遼子は恋をしているのよ、きっと」

恵梨佳の言葉を受けて、ボーイッシュな茉美があたしの肩をバン

バン叩いた。

「おおっ！ 何処で男を見つけたんだあ？ あたしにも紹介しろよな。全く、水臭いんだから」

あたしは、茉美と恵梨佳を見つめて言った。

「そんなんじゃないってば。この前のおじさんが気になってるのよ」
恵梨佳が、遼子を覗き込んだ。

「おじさんって誰なの？ 気になるわねえ、その言い回しは」

おじさんアレルギーというより、男がちょっと苦手な茉美は露骨に嫌な顔をした。

「えー、おじさん？ 誰なんだよ、それ。あー、やだやだ」

あたしは、茉美と恵梨佳の反応にうんざりした。

「だからさ、昨日話した、図書館のおじさんだよ。一緒にラーメン屋に行ったって話の」

茉美は、もう違う話題を話し始めていた。

「ラーメン屋って言えば、典子と了一が一緒に食べてたって噂だよ」
「キヤー、ヤダ、ヤダ！ 了一样は誰のモノでもないのよあー！」

あたしは、窓から外を見た。

大きくて真っ黒な雲が、空を覆い始めていた。

空の上の方を見ると、入道雲が発達して金床雲に成りかけていた。

「雨、降りそうだなあ」

あたしは、誰に言うとも無しに呟いた。

あたしの予測した通り、午後三時を回った頃からは土砂降りの雨になった。最近はゲリラ豪雨とか言うらしい。

アンニュイな気分で、学校帰りの、駅までの道を歩いていた。既に靴は当然、靴下もグッショリと濡れて、傘を差しているけれど、傘の役割を果たさないごとく、制服のカッターシャツの両方の肩も濡れて、皮膚に張り付いていた。

いつも学校の帰りに通りかかる、ちょっと大き目の公園を何気なく見ると、男の人が一人、大きな木の下で雨宿りをしていた。あた

しは、直感でそれが「おじさんだ」と分かった。どうして分かったのかは、あたし自身も判らないけれど、気が付いた時には、あたしは公園の中へと向きを変え、大きな木の下に向って走り出していた。「おじさん！」

あたしは、雨音に負けないように大きな声で呼びかけた。すると、おじさんはあたしの方を見てビックリした。「どうしたの？」

おじさんは、あたしに声を掛けてくれた。間違っではないなかった。あの時のおじさんだった。

あたしが木の下の辿り着くと、おじさんは濡れてない場所を空けてくれた。

「やっぱり、おじさんだった。よかった」

あたしは、息を切らせながら言った。

「僕に何か、用があつたのかい？」

おじさんはキョトンとしていた。

「うん、あ、いや、何となく。もう一回、逢いたいなあって」

あたしは、照れも無く平然とそんなことを言つた自分に驚いていた。

「いやあ、おじさんは嬉しいなあ」

おじさんは照れながら、あたしにハンカチを差し出した。

あたしは、何の抵抗も無くおじさんのハンカチで濡れていた顔を拭つた。洗剤の匂いと共におじさんの臭いがした。いわゆる『加齢臭』というヤツなのだが、今のあたしには心地よい香りに思えた。

「学校帰りなの？」

おじさんの質問に、あたしは大きくうなずいて返事をした。その時だった。

一瞬、空全体が白く輝いたかと思つたら、大気を揺るがすような爆音が炸裂した。

「きゃっ！」

あたしは、思わずおじさんに抱き付いた。おじさんはあたしをし

っかりと受け止めてくれた。

あたしとおじさんは、しばらくそのまま抱き合っていた。

「大丈夫だよ。ただの雷だよ。でも、近くに落ちたかもしれない。ほら、ビルの電気が消えてる」

おじさんは、あたしを促すように、周りのビルを指差した。

「ホントだ」

あたしはおじさんから身体を離して周りを見た。確かに先ほどまで白く光っていたビルの窓は全て黒い色をしていた。

「酷い雷雨だけど、夕立だからすぐに止むよ。しばらくここに居た方がいいね」

おじさんは、諭すようにあたしに話し掛けた。あたしはおじさんに引っ付きながらコクンとうなずいた。

何回か、雷が鳴ってから段々と空が明るくなってきた。そして明るくなったと思ったら、すぐに雨が止んで雲が切れ始めた。

「ほら、夕立だった。もう雨が上がったよ」

おじさんは木の下から出て、両の手のひらを上に向けて、雨が降っていないというジェスチャーをした。あたしは、おじさんのその姿が可笑しくて、クスクスと笑った。

「可笑しいかい？」

おじさんもニヤリと笑って、あたしに応えてくれた。

「おじさんの名前はね、『大村 俊朗』っていうんだ。『トシちゃん』って呼んでよ」

あたしは、急に自己紹介を始めたおじさんにキョトンとしてしまった。

「何だよ、ちゃんと突っ込んでくれよあ」

あたしのその態度に、おじさんは不服そうだった。

「ねえ、それじゃあ突っ込むわよ。俊おじさんの携帯電話の番号とメールアドレスを教えてよ」

あたしは、マジに訊いていた。おじさんからおどけた表情が無くなった。

「え、マジ？」

おじさんは聞き返してきたけど、あたしは無視して真剣に言った。
「あたしの携帯電話の番号とメールアドレス、教えるから」

おじさんは、あたしの真剣な顔を見て携帯電話を取り出した。そして、プロフィールを表示してあたしに見せてくれた。あたしは素早く自分の携帯電話に番号を打ち込んで発信した。するとおじさんの携帯電話が鳴った。

「それが、あたしの番号」

そして、もう一度おじさんの携帯電話のプロフィールを見てメールアドレスを打ち込んでから、すぐに空メールをおじさんに発信した。するとまた、先ほどとは違う着信音でおじさんの携帯電話が鳴った。

「それが、あたしのメールアドレス。そして、あたしの名前は『咲田 遼子』よ」

おじさんは、携帯電話を操作しながらうなずいた。入力が完了したおじさんは、顔を上げてあたしを見た。あたしは間を置かずにこう言った。

「俊おじさん、あたしとお付き合いして」

言い終わった後、あたしはおじさんに走り寄って抱き付いた。

03 Light Morning

相変わらず、父親は家に帰ってこない。単身赴任のように週末に帰ってくるだけ。父親は母親には単身赴任と言っているみたいだし。母親も感付いている。それは浮気だと、不倫だと。

あたし、一度だけ父親の後を追ったことがある。郊外の安アパートで、二十代後半のさほど綺麗じゃない女が出迎えてた。出迎えてもらった父親の嬉しそうな顔は、家では見せたことのない顔だった。あたしは、父親のそんな顔を見たのは初めてだったから、凄くショックを受けたことを憶えている。

母親も良く我慢していると、あたしは思う。でも、あたしが居ることと母親自身が父親から独立できないので、母親は今の状態を甘んじて受け入れているだけなのだろう。だから、あたしに対する期待は相当だ。あたしを味方に引き入れようとすることと、母親自身の将来をあたしに託しているのだ。だから、あたしの言うことも聞き入れる代わりに、あたしに対して五月蠅いし、拘束や束縛はするし、ほとんど監視されている状態だ。

あたしは、そんな状況にうんざりしているし、もう疲れていたのだ。

そんな時に出逢ったのが『大村 俊朗』だった。

おじさんは四十八歳で、イーベンチャー企業の常務。会社創業のメンバーなんだそうで、今は病気で療養中なので仕事の量を減らしてもらってるそうだ。

今は独身の俊おじさんだけど、かつては家族が居たらしい。俊おじさんが言うには、会社の立ち上げで家庭を顧みなかったそうで、十年位前に離婚したらしい。子どもが居たそうだけど、奥さんに親権が渡ったんだって。

あたしよりも大きい娘さんが一人いるそう。

だから、今の俊おじさんは家族が居ないことが寂しいらしくて、

時々娘さんと会うそうだけどそれじゃ物足りないっていつもこぼしてる。……ということは、あたしって娘さんの替わりなのかな？

あたしは、俊おじさんのことが好きなんだけど。

でも、あたしも俊おじさんのこと、父親みたいに思っているところは全く無いと言ったら、嘘になるかな。「こんなお父さんがほしいなあ」って思う時もあるから否定できない。

一つだけ確かなことは、俊おじさんもあたしも「家族を求めている」という意味では利害が共通しているのかもしれない。

とにかく。

俊おじさんは、あたしの「足長おじさん」になったのだ。

もっとも、これはあたしが勝手に思っているだけで、俊おじさんはどう思っているか、本当のところは分からない。でも、それでいいんだ。あたしは、俊おじさんのことが大好きなんだもん。

それで、あの雷雨の日から、あたしは俊おじさんとお付き合いを始めた。もちろん、援助交際なんかじゃないよ。俊おじさんからお金をもらおうなんて考えたことも無いよ。

毎日、メールしたし、電話もした。あたしのくだらないメールや電話の内容でも俊おじさんは、あたしのメールにもちゃんと応えてくれるし、電話をしてもちゃんと出てくれる。あたしは電話もメールもそんなにしない方だから、俊おじさんもちやんと対応してくれているのかな。

デートは一週間に一回くらい。いつも日曜日かな。駅で待ち合わせで、俊おじさんの黒のワゴン車にあたしが乗り込む。そして、郊外のレストランでランチを食べて、お話をして、それでまた来週。そんな感じのデート。あたしは当然、デートのつもりだったけれど、俊おじさんはどう思っていたかはよく分からない。

来週から七月という頃、俊おじさんとデートした時、俊おじさんは意外なことを言ったんだ。

「遼子ちゃん、来週の日曜日は海に行かないかい？ お友達を誘ってもいいし」

あたしはちよつとビツクリして、訊き返した。

「遊びに連れて行ってくれるの？」

あたしの質問に、俊おじさんは大きく首を縦に振った。

「朝早く、そうだな、七時頃にいつもの駅に迎えに行くよ。ちゃんと水着を持ってきたよ」

俊おじさんは、ちよつと嬉しそうだつた。あたしも嬉しくなつた。

「うん、分かつた。親友二人を連れてきてもいい？」

俊おじさんはうなずいた。

「いいよ。じゃ、来週ね。遅刻しないでよ」

「大丈夫よ」

あたしは、俊おじさんに精一杯の笑顔に向けた。

「ねえ、ねえ。来週の日曜日に海に行かない？」

次の日の月曜日、あたしは学校で親友の茉美と恵梨佳に声を掛けた。

「どういう風の吹き回し？ 遼子が海に誘うなんて」

茉美は怪訝な顔をした。

「海ねえ。どの水着を持っていこうかしら？ それとも新しい水着を買っちゃおうかしら？」

恵梨佳は既に行く気満々だった。

「おい、恵梨佳！ 返事をしないうちにもう段取りに入ってるのか？」

茉美は呆れていた。

「じゃ、二人ともOKね？」

あたしは、得意気な顔で二人に念を押した。

「もちろんよ」と恵梨佳。

「私も連れて行ってよー」と茉美。

「日曜日の朝七時に、駅で待ち合わせね。遅れたら置いて行くからね」

茉美は、不思議そうな顔をしてあたしに訊いた。

「駅で待ち合わせてどうするの？」

あたしは何事も無く答えた。

「俊おじさんが連れてってくれるわ。あたし、海に行かないかって誘われたの。友達も連れて来ていいって」

恵梨佳はにこやかに笑って言った。

「あらあら。お惚気、ご馳走様。私達もおこぼれに与れるって訳ね」
「何だよ、私達は付き添いか」

ちよつとガツカリした風味の茱美だった。

「いいじゃないの、遼子が誘ってくれた海ですもの、贅沢は言わないの」

恵梨佳が茱美をなだめた。

「はいはい、分かりました」

恵梨佳はすかさず、あたしにこう切り替えした。

「それじゃあ、今日の学校帰りにみんなで水着を買いに行きましょう」
う

日曜日、あたしは寝坊した。昨夜はよく眠れなかったのだ。

だって、俊おじさんが誘ってくれた海だもの、興奮して眠れなかったのよ。

昨日のうちに荷物は用意しておいたからそれを引提げて、髪のセツトや化粧、朝食もそこにうちを出て、何とか予定の電車には乗れた。電車の中で多少なりとも身なりを整えたのだった。

あたしが駅の改札口を出たのは、六時四十五分。全然余裕で間に合ったなあと思っていたら、茱美と恵梨佳は既に居て、しかも俊おじさんまで居た。しかも、茱美と恵梨佳は完璧なスタイルでそこに立っていたのだ。

いつもは、男の目なんか気にしない、男性恐怖症の茱美だが、今日ばかりは巻きスカート風スウェットロングスカートに、白のゆつたりTシャツに黒のタンクトップで、茱美のショートカットに似合うフェミニンなスタイルだった。

そして、ファッションと男の視線をいつも気にしている恵梨佳は、透け感のあるオーバーレース素材で出来た、短め丈で肩出しデザインのピンクブラウスに、ツイル素材で裾がフリンジになっているカーキ色のショートパンツで、キレイな脚線を晒していた。

あたしといえば、全面花柄プリントで長め丈のワンピースで、可愛い感じのファッションにしたのに、あの二人が妙に頑張るから目立たなくなっちゃったよ。

俊おじさんは、紺色のボーダーTシャツに、テッセル素材の紺のカーゴパンツ。ちょっと若作りしたなあ、俊おじさん。無理しなくてもいいのに。

「遼子、遅いぞ。おじさんも恵梨佳ももう待てるんだぞ」

茉美は嬉しそうに大きく手を振ってあたしを導いていた。あたしは溜息をついた。これじゃ誰が誘ったのか、分からないよ。

「遼子ちゃんが普通なんだよ。君達二人が早過ぎるんだよ」

そう言って、俊おじさんはあたしをかばってくれた。

「あら、そうあ？ おじさまこそ、あたし達が来た六時には、ここにいらしたじゃない」

恵梨佳の言葉に、あたしは啞然とした。茉美と恵梨佳は一時間前で、俊おじさんはそれ以前って。あなた達は何を考えているのよ、まったく。

「おじさんは、間違えないようにって早めに来ただけだよ」

もういいわ、そんなことは。あたしは呆れて何も言えなくなっていた。

「それにしても茉美と恵梨佳は俊おじさんのこと、よく分かったわね？」

あたしの問いに、俊おじさんが答えた。

「遼子から友達は二人だつて聞いてたし、明らかにそれらしい雰囲気だったからこっちから声を掛けたんだよ」

「あたし達もそうじゃないかなあって。黒のワゴン車から出てきたら間違いないって」

あたしは、開いた口が塞がらなかった。あたしの存在って何？って思っちゃったわよ。

「さあ、早く出発しましょう。渋滞で混んじゃうから」

「そうね、遼子さん、早く荷物を」

「さあさ、乗った、乗った」

あたしは急かされるようにバックドアから荷物を入れた。それから、いつもは助手席に座るのだけど、今日は茉美や恵梨佳と座ろうと後部座席のドアを開けようとしたら、茉美と恵梨佳に拒否された。

「お姫様は、王様の横に座らなきゃ。私達は侍女ですから」

そう言われて、あたしは助手席に座った。ちよつと嬉しかった。

茉美や恵梨佳が気を使ってくれたことに。

「それじゃ、出発するよ」

そう言つて俊おじさんは、シフトノブをドライブに入れて、バックミラーで後方を確認してからスルリと車を走らせたのだった。

04 Summer Suspicion

「じゃ、女の子たちはここで水着に着替えてくださいね。お父さんはこっちょ」

海の家専属の駐車場に車を停めて、ついでに部屋も借りて、海の家に入った。海の家のおばちゃんは一丁寧に海の家の中を案内してくれた。

「おじさまのこと『お父さん』だって。そりゃそうね」

恵梨佳は納得した風情だったが、茉美はニヤニヤしながら遼子に耳打ちした。

「まさか、この三人の小娘のうちの一人がおじさんの恋人だとは思えない。イヒヒヒヒ」

さつさと着替えを始めていた恵梨佳は、小さな声で呟いた。

「そーゆーことは、おおぴらに言わない方がよくてよ」

バツの悪い顔をした茉美も、そそくさと着替え始めた。

あたしは着替えながら、二人の言葉に顔を赤らめたのだった。

三人とも着替えを終えて部屋の外に出ると、俊おじさんがそこで待っていた。

俊おじさんは、タフタ素材で紺色のハーフ丈スイムパンツ、グレイとブラックの長袖ブランドラッシュガードを着ていた。可笑しいのは、その頭に麦わら帽子が納まっていたことだ。

「おじさん、変！　そこまで決めているのに、なんで麦わら帽子なのお？」

あたしは、かつこ悪い恋人を友達に見られたように巻くし立ててしまった。

「えー、いいじゃないの。遼子がそんなに怒ることないじゃない」
茉美は、そう言って俊おじさんを擁護した。

「ごめんよ、慌てててキャップを忘れたんだ。帽子がないと暑いだ

る。仕方がないからここで買ったんだよ」

俊おじさんはすまなさそうにしていた。

「帽子なんて些細なこと。さあ、海を楽しみましょうよ」

恵梨佳が上手く仕切り直してくれたので、あたしはなんとか納得することにした。

あたし達三人と俊おじさんは、海の家から砂浜に出た。

白い砂は焼けていて、青い空からは紫外線がバリバリと降り注ぎ、海は白い波を立てて、数十メートル先の波打ち際で波がサラサラと音を立てていた。

「暑いわねー」

そう言ってサングラスを掛けた恵梨佳の水着は、黒のシンプルなビキニ。彼女はスタイル抜群だから何を着ても似合う。特にバストのポリウムが凄いから、こんな水着でもカッパよく着こなしちゃうのだ。その上から、白のレースニットワンピースを着て、透けた黒のビキニが女のあたしが見ても何ともセクシーに見える。

「海だ、海！」

はしゃいで出てきた茉美の水着は、ピンクとブラウンのツーカラーでオープンショルダーのワンピースで、胸の部分にラッフルが沢山付いてちよつと胸のない茉美には程よい感じだ。その上からスカイブルーのタオルフードジャンパーを羽織っている。ここが茉美の限界かな。

あたしは、フリルが付いたチューブトップのアクアグリーンのツースピースビキニ。それにライトブルートーンでホルターネックラインのプリントロングワンピースを羽織っている。ポリエステルの薄地なのでちよつとビキニが透けているのが恥ずかしいけど、ちよつと大胆になってみた。

目のやり場に困った俊おじさんは、ビーチパラソルを三本も借りて、砂の上に突っ立てた。

「日焼けがヤバイお嬢様たちばかりだからな。一人に一つ、パラソ

ルを使いなさい」

わーいと騒ぎながら、あたし達三人は、それぞれのパラソルを陣取りシートを敷いて自分の城を築き始めた。あたしは、ビーチパラソルの半分だけを使って、俊おじさんに声を掛けた。

「おじさん、あたしの所の半分を使っていいわよ」

おじさんは遠慮がちに、あたしのビーチパラソルの半分に荷物を置いた。

「さあ、泳ぎに行くぞー」

俊おじさんは元気良く右手を挙げた。茉美がそれに答えて右手を元気良く挙げて、あたしと恵梨佳は緩く右手を挙げた。

四人は熱い砂浜を走って通り抜け、波打ち際に辿り着いた。

「お、ちよつと冷たい」

最初に水の中に入った茉美が足で水の温度を確かめた。だが、茉美と恵梨佳はそのままジャブジャブと海の中に入り、腰まで浸かった。そして、あたしと俊おじさんに向かって水を撥ね掛けた。

「きや、冷たい」

あたしは思わず声を出した。そして私も負けじと海の中に入り、茉美と恵梨佳にバシャバシャと水を引つ掛けたのだった。

三人が頭までびしょぬれになった頃、俊おじさんは少し沖の方で悠々と泳いでいた。麦わら帽子を被ったままで。

「おじさーん。何か変よ、その格好」

あたしはそう奇声を出したが、俊おじさんはそれでも悠々と泳いでいた。茉美は俊おじさんの方へ泳いで行ったが、あたしと恵梨佳はほとんど泳げないので、波打ち際でチャプチャプとやっているのが精一杯だった。

俊おじさんと茉美は、競争しながら更に沖の方へ向かって泳いで行った。そこで立ち泳ぎしながら、更に沖合いの波消しブロックまで泳ぎ着き、波消しブロックの上で仲良く日向ぼっこをする様子が、遠くから見えたのだった。

「浮き輪が欲しいわね」

「ホントね」

あたしと恵梨佳は、ちよつと不機嫌な顔を見合わせたのだった。

お昼ご飯は、海の家で四人ともカレーライスを食べた。それも普通の辛さがあるのにもかかわらず、四人とも激辛のカレーを頼んで、ヒーハー言いながら食べたのだった。

「やっぱり、これくらい辛くないと駄目ね、カレーは」

「うん、その通りね」

あたしと茉美は顔を真っ赤にしながらカレーを頬張った。

「やっぱり、これは辛過ぎるよ」

「辛くて食べられない」

俊おじさんと恵梨佳は音を上げていた。

「なんでこんな辛いカレーを頼んだのかしら、あたし」

「おじさんもだよ」

俊おじさんと恵梨佳は泣きそうな顔でお互いに見合っていた。

「カキ氷で口の中を冷やすかい？」

俊おじさんの提案に、恵梨佳は大きくうなずいた。

次の瞬間、俊おじさんは右手を高く上げて大声を出した。

「おねえさん、イチゴのカキ氷！」

俊おじさんは次のオーダーをしていたのだった。

「あたし、ブルーハワイ」

「私、レモン」

「えーと、えーっと。私はメロン」

あたしと茉美と恵梨佳も負けずに注文した。

「あいよー、カキ氷、全四種類それぞれ一つずつだねー」

海の家のおばちゃんは、景気のいい大きな声で大雑把に注文の復唱をしたのだった。

辛いカレーの後に食べたカキ氷は格別の味がした。

日が傾いてほんの少し涼しくなった頃に、あたし達は海の家での着替えを終わって、俊おじさんの黒のワゴン車に乗り込もうとしていた。

「忘れ物は無いかい？ 大丈夫かい？」

俊おじさんの質問に、あたしと茉美と恵梨佳は大きくうなずいた。「大丈夫のようだね。さあ、乗って」

往路と同じように、あたしは助手席で茉美と恵梨佳は後部座席に座った。

しばらく走ってから、俊おじさんがルームミラーを覗き込んで言った。

「おや？ 後ろのお二人さんはノックダウンだ」

出発して十分も経たないうちに後部座席の二人はスヤスヤと眠ってしまったようだった。あたしが後部座席を振り返ると、お互いを支えとして寄り掛かり、お互いの日焼けした鼻が今にもくっ付きそうだった。

「あの二人はずい分、おじさんと仲良くしてもらったから、疲れたのかしらね？」

あたしは、俊おじさんに対して少し嫌味を言った。

「そんなことないよ。遼子ちゃんも同じつもりだったけどな」

俊おじさんの言葉に、あたしは窓の外を見ながら気のない返事をした。

「ふーん、そーなの」

俊おじさんは、ちよつとマジに聞き返してきた。

「それって嫉妬？ それともイジメ？」

あたしは、俊おじさんの毒のある言葉に反応してしまった。

「それ、どういう意味よ！ あたし、いじめてなんかいないわよ！」
俊おじさんは、ちよつとはに cand。

「嫉妬なら、おじさんは嬉しいな」

あたしは、見透かされた思いがして悔しかった。だから、あたしは正直にズバズバと言った。

「ええ、そうよ。嫉妬よ。あたしだけのおじさんでいて欲しいの。あたしだけを見て欲しいのよ。それは駄目なのかしら？」

俊おじさんは黙ってしまった。それでもあたしは言葉を続けた。
「だって、あたし、おじさんのことが好きなんだもん。それだけじゃ駄目なの？」

あたしの目から、大粒の涙がこぼれていた。
しばらく沈黙が続いた。

あたしは、鼻をすすりながら窓の外を見ていた。

「分かったよ」

俊おじさんは、正面を見て運転しながらボゾリと呟いた。

「おじさんはどうすればいい？」

俊おじさんは、あたしに静かにそう尋ねた。

あたしは、今想っていることを言葉にした。

「おじさんと一緒に居たいの。少しでも長く」

あたしの答えにしばらく考え込んだ俊おじさんは、一瞬あたしの方を見てから優しく訊いた。

「今度は、おじさんと遼子ちゃんと二人っきりで海に行こう。それで駄目かな？」

あたしは、おじさんに思いをぶちまけた。

「いいけど、今日みたいなのは嫌。他に誰も居ないような感じで、おじさんと二人っきりがいい」

あたしの言葉に、俊おじさんはまたしばらく考え込んだ。そして、ゆっくりと言った。

「人里離れた、海に近い別荘があるんだけど、そこへ行くかい？」

あたしは、即答でうなずいた。

「ただ、ちょっと遠いから日帰りって訳にはいかないんだ。それでもいいかい？」

あたしは、俊おじさんが言い終わると同時にうなずいていた。

「いいわよ。あたし、何とかする」

あたしは、何の恐れもなく想うままに言葉を発していた。

そして、運転する俊おじさんの腕にしがみついていたのだった。

05 Riverside Hotel

朝から車を飛ばして四時間、ようやく辿り着いたそれは、ひっそりとした林の中にあった。

林の中を俊おじさんの黒のワゴン車で通り抜けていく。すると俊おじさんは、小さな看板のところでわき道に逸れた。どうやら目的地が近い感じだった。

狭い道を俊おじさんはゆっくりと車を進めて行くと、少し開けていて日差しが差し込むところで行き止まりになった。俊おじさんはその開けた場所の真ん中で車を停めた。

俊おじさんは車から降りると、バックドアを開けて荷物を下ろし始めた。バックドアから俊おじさんがあたしに話し掛けた。

「着いたよ」

あたしはドアを開けて車を降り、周りを見回した。

鬱蒼とした森に囲まれて、ここだけは芝生が張られた広場になっていた。広場の南側は林になっていて、枝のすき間から海が薄っすらと見えた。そして、昼でも日の当たらない西側の場所に、少しくたびれた建物が建っていた。

「おじさんの別荘にようこそ。……別荘と言っても、ずい分前に手作りしたキットのログハウスだけだね」

それは、おじさんの持ち物のようだった。ログハウスといっても丸太ではなくプレカットされた建物風の造りだった。壁は白で破風や柱はライトグリーンに塗られていたようだが、今は風化して所々が剥げ落ち、汚れて黒ずんでいた。

「それでも先週、少し手入れをしたんだよ。あまりにも酷かったのだね」

あたしは、荷物を下ろしている俊おじさんに向き直って、最高の笑顔で言った。

「うっん、そんなことないわ。とっても素敵よ」

あたしはホントにそう思ったのだ。恋人同士が暮らすには素敵だ
なっ。

「そう言ってもらえて、おじさんは嬉しいよ。先週手入れをした甲
斐があったから」

そついうと、あたしの大きなバッグを持って、玄関を開けてくれ
た。

「さあ、どうぞ。おじさんのお姫様」

俊おじさんは、あたしの手を取ってエスコートしてくれた。

外観は煤汚れていたけれども、内部は綺麗だった。クリーム色の
壁紙にライトグレーのフローリング、こざっぱりとした室内は好感
が持てた。

「ごめんよ。部屋数は無いんだ。ここで一緒に寝泊りすることにな
るけどいいかな？」

俊おじさんは、申し訳なさそうにあたしに訊いた。あたしはフェ
ミニンレースのフリルハットを脱ぎながら、俊おじさんに笑顔でう
なずいた。

「いいわよ。あたしは全然気にしないわ」

するとおじさんは、あたしを覗き込んでもう一度質問した。

「お風呂はシャワーのみで脱衣場も無くて直接なんだ。だから、脱
ぎ着もここだよ？ もちろん、おじさんは遼子ちゃんが着替える時
は外に出るけどね」

あたしは、俊おじさんに最高の笑みを向けた。

「そんなに気を使わなくてもいいのよ。おじさんとあたしのバカン
スなんだもの」

俊おじさんは、照れ臭そうに頭を掻いた。

「じゃあ、残りの荷物を下ろしてくるから」

そつ言つて、俊おじさんは玄関から出ていった。

あたしは室内を見回した。ワンルームになっている部屋の奥には
アイランドタイプのカウンターキッチンがあつて、その向こうには
食器棚が据え付けてあつた。部屋の右側にはトイレとシャワールー

ムがあつて洗濯機が置いてあつた。部屋の左手には段差があつて、そこは四畳半ほどの畳のスペースになっていた。

あたしは、自分の大きなバッグを持ってステップアップした畳の上に置いた。そして、部屋の南側の窓を開けたら、気持ちのいい風が部屋の中に吹き込んできた。

「チリン、チリン」

音に誘われて、あたしは窓の上を見た。そこにはガラスの風鈴が吊るされていて、爽やかな風で心地良い涼しげな音を立てていた。

荷物を運び込んでいた俊おじさんも、風鈴の音に気が付いてあたしに説明してくれた。

「ここにはエアコンが無くてね、多少なりとも涼しげに感じるようにと風鈴を吊るしてみたんだけど」

あたしは、その説明に微笑んで答えた。

「うん、いい感じよ。おじさん、ありがとう」

そう言うのと、俊おじさんは顔を赤くして外へ出ていった。出て行く間際に、あたしに声を掛けた。

「荷物を入れたら海に行こう。着替えをして準備して」

あたしは、俊おじさんの言葉を受けて元気良く返事した。

「はい。水着に着替えるわねー」

あたしは早速バッグを開けて、水着を取り出した。

フリルが付いた白のワンピースで、ウエスト部分がカットアウトされていて、胸元は深めのVラインになっているモノキニ水着だ。ビキニよりも更にセクシーなモノキニ水着で、白はレーシーで透け感があつてちよつと恥ずかしいんだけど、ちよつと大胆になろうと思つて。

あたしは、ワゴン車からバーベキューセットを降ろしている俊おじさんを横目で見ながら、カーテンも閉めず、タオルで隠しもしないで、Ｔシャツとジーンズを脱いで下着姿になった。

そこまでは勇気があつたが、やっぱり恥ずかしくて壁に隠れて、ブラジャーを取りパンティを脱いでモノキニのワンピース水着をサ

サツと穿いて、ホルターネックの紐を結んだ。だが、バックの紐がどうしても結べなかった。

仕方がないので、下着とＴシャツとジーンズを畳んでから、海に持って行くバスタオルやサングラス、飲み物と日焼け止めなどの入ったポーチをトートバッグに入れて準備をした。

窓の外を見ると、俊おじさんは荷物を降ろし終って、バーベキューセットの準備をし終えたところだった。

「おじさん、準備が出来たわよー」

そう言つと、汗だくの俊おじさんはタオルで汗を拭いてからこちらを見た。

「こっちも、だいたいの準備が終わったよ。それじゃ、海に行こうか」

あたしは、おじさんに訊いた。

「え、おじさんはそのままで行くの？ 着替えないの？」

俊おじさんはニヤリとした。

「だって、おじさんはもう、海パンを穿いてるし」

よく見ると、おじさんのハーフパンツは、前回の海水浴で穿いていた水着だった。一緒に車に乗っていたあたしは全然気が付かなかった。ちよつと顔が赤くなった。

俊おじさんは、二リットルのお茶のペットボトルを持つと、南側の林の切れた道へと歩き出していた。

「あーん、待つてよー」

あたしは大急ぎでトートバッグを持って、玄関で可愛い花の付いたサンダルを履いて、おじさんの後を追っかけた。

しばらく歩いて行くときつい斜面になって、いくつかのつづら折りの道を通って崖の下に出た。

「うわあー、キレイ！」

あたしは思わず声を上げてしまった。

そこはまさしくプライベートビーチだった。三十メートルほどの潮や潮位の加減で砂が溜まったという感じの砂浜だった。だから遠

浅という訳ではなかったが、海はダークエメラルド色でキレイな色をしていた。そして、その砂浜にはベンチ風の岩がいくつか置いてあって、休憩したり寝そべったりするには丁度いい感じだった。

あたしはそこに荷物を置き、俊おじさんはそこに腰を下ろした。

「いいところだろ？　でも、自分で何もかも管理しなきゃいけないし、維持費も高い。だから、この辺の別荘はなかなか売れてないんだ」

俊おじさんは、ペットボトルを一口飲んだ後、海に向って進み始めた。

「さあて。ちよつと汗を流してくるか」

あたしは、俊おじさんの言葉にムツとした。

「おじさん、雰囲気ぶち壊しじゃないの！　お風呂じゃないんだから！」

俊おじさんは、後ろ向きに愛想笑いをしながら海へと飛び込んでいった。

あたしも海に行こうと、ピンクでフードに猫耳が付いたパイル地のジャンパーを脱いだところで、大事なことに気が付いた。あたしの水着の、バックの紐が結んでいなかったことに。

「おじさん、ちよつと来てー」

あたしは波打ち際まで行って、俊おじさんと呼んだ。

キョトンとした顔をして俊おじさんは波打ち際に上がってきた。

「なに？　どうしたの？」

問い掛ける俊おじさんに、あたしは後ろを向いて紐を後ろ手に差し出した。

「これを結んで欲しいの」

「えー？　何か恥ずかしいなあ」

それでも俊おじさんは、紐を持ってぎこちない手付きで結び始めた。

「痛い！　おじさん、締め過ぎ」

「あ、ごめん、ごめん」

俊おじさんは、慌てて緩めてから結び直した。

「このくらいでいいかい？」

問い掛ける俊おじさんに、あたしはおじさんの方を向き直って大きくうなずいた。俊おじさんは、あたしの大胆な水着に目のやり場が無いようだったが、一言だけ感想を言ってくれた。

「遼子ちゃん、今日はセクシーだね」

あたしは、その言葉で急に真っ赤になって慌ててごまかした。

「そお？ それじゃ、おじさん。一緒に泳ご」

あたしは、俊おじさんの手を取って海にジャブジャブと入っていた。俊おじさんもつられて一緒にザブザブと海に入っていた。あたしはわざと深いところまで行って、俊おじさんにしがみ付いた。

「やだ、急に深くなってるう」

「ここは深いからなあ。大丈夫かい？ おじさんにつかまって」

俊おじさんは、何の疑いも無くあたしをしっかりとホールドしてくれた。

しばらくそのまま、ふたりで波に漂っていたが、ここは海流の影響で水温が低かった。ちよつと冷たくなってきたので、俊おじさんはあたしを伴って沖から泳いでビーチへと上がった。

「ここはちよつと温度が低いんだ。それが玉に瑕なんだな」

俊おじさんはそう言いながら岩に座った。あたしはその横に身体を寄せるようにして座った。

「どうした？ 寒いのか？」

それほど寒くは無かったのだが、あたしは俊おじさんと居たかったから大きくうなずいた。そして、あたしと俊おじさんは寄り添ったまま、二人と話もせず長い時間が経過したのだった。

06 Foggy Downtown

日が傾いてオレンジの光が差し始めた頃、俊おじさんは別荘に戻ると言った。夕食の準備をしないといけないからだ。俊おじさんは、あたしにまだビーチに居てもいいよと言ってくれたが、あたしはこんなところに一人で居ても面白くも何とも無い。

「あたしにだって何か出来ることがあるわ。手伝わせてよ」

そう言つと、俊おじさんはニコリと笑つてうなずいた。

「分かったよ。おいで」

俊おじさんは、あたしのトートバッグを持って歩き出した。あたしは俊おじさんの後について、崖を登つて行つた。

「まず、シャワーを浴びて着替えなさい。おじさんは水道のホースで潮を洗い流すから」

俊おじさんはそう言つて、蛇口を捻つてホースから水を出した。あたしはその時に悪戯心が働いた。俊おじさんが持っていたホースを奪つて俊おじさんに水を掛けたのだった。

「ひゃー、冷たいよー」

俊おじさんはそう言いながらも、その場でぐるぐると回つて全身に水を被っていた。その姿を見て、あたしは俊おじさんにホースを渡した。

「ねえ、おじさん。あたしにもホースから水を掛けてよ」

俊おじさんは、放物線を描いてあたしにホースから水を掛けてくれた。

「ひゃー、冷たい、冷たい」

あたしも、おじさんと同じようにその場でグルグルと回つた。あたしのモノキニの水着は、水に濡れてフリルが引っ付きボディラインが露わになった。それに水に濡れたことでちよつと透け気味になっていた。

あたしはそれに気付かなかつたが、俊おじさんが急にホースの水

をあたしに当てるのを止めてこう言ったのだ。

「遼子ちゃん、その水着はセクシー過ぎだ。おじさん、ちょっと変な気になっちゃうよ」

あたしはそれを聞いて赤くなったと同時に嬉しくなって、水道の蛇口を止めている俊おじさんを後ろから抱き締めたのだった。

「何だい、遼子ちゃん？ ビックリするじゃない」

俊おじさんは慌てて振り解こうとした時、あたしは大胆に甘えるように言った。

「俊朗さんのこと、好きです。ねえ、キスして」と。

あたし自身、ビックリしたけど驚きはしなかった。

俊おじさんはあたしの方へ向き直ってあたしの肩を抱き、目を閉じたあたしの唇にそっとキスをした。でも、俊朗は数秒間、唇を合わせただけですぐに離れてしまった。あたしはもう少し期待したのに。

「さあ、バーベキューの火を起こさないと夕飯が食べられないぞ」

俊朗は、そう言ってTシャツを着替えてから、軍手をしてバーベキューピットに炭を並べ始めた。

あたしは、気を取り直してピンクのパイル地ジャンパーを羽織って、俊朗に尋ねた。

「あたしは何をすればいいのかな？」

俊朗は、ピットに着火オイルを垂らして火を点けている最中だったが、あたしの方を向いて指示してくれた。

「青いクーラーボックスに入っている食材を出して欲しいけど、その前にグレーのプラスチックボックスからプラスチックの食器類をテーブルに出して欲しいな」

「うん、分かったわ」

あたしは飛び跳ねるようにグレーのボックスに近づき、中からコップやナイフ、大皿とディッシュを取り出した。その時、あたしはふと思い付いて、緑色のクーラーボックスを開けて缶ビールを取り出した。

「俊朗さん、ビールは飲まないの？」

炭によやく着火した俊朗は、急に名前で呼ばれたことと、ビールのことをすっかり忘れていたことで混乱しているようだった。

「あ、忘れてた。飲みます、飲みます。……えっと、あの、名前で呼ばれると変な感じだよ、遼子ちゃん」

バーベキューピットに近づいて俊朗に缶ビールを渡したあたしは、ドヤ顔で言った。

「だって俊朗さんはあたしの恋人なんだもん、名前で呼ばなきゃ。

『おじさん』でもいいけど、何となく嫌な感じがするの。それに、俊朗さんもあたしのことは『遼子』って呼んでよ。『ちゃん』付けは止めて欲しいわ」

俊朗は困った顔をしながら、ビールをキューツと一口飲んでから言った。

「分かったよ、遼子。……これでいいかい？」

あたしはコーラを飲みながら、ちよつと照れてコクリと首を上下に動かした。

夕陽が空をオレンジ色に染めた頃、バーベキューピットの火がアツシユダウンして焼き頃になった。

あたしは玉ネギを輪切りにし、ナスを縦割りにし、ピーマンを切つて、ジャガイモを茹でて輪切りにした。それからレタスをむいて洗い、手で千切ってからキュウリのスライスを混ぜ合わせてサラダを作った。

「遼子は料理が出来るんだ。ちよつとビックリだったよ」

感心している俊朗を睨んで、あたしは口を尖らせた。

「あのねー！ 失礼しちゃうわ。あたしだってこれくらいは出来ますよーだ」

俊朗はトボーンステーキを焼きながら微笑んだ。

「それは、それは。申し訳ございませんでした、お嬢様」

ステーキを裏返して塩を振り掛けコシヨウを擦りながら、俊朗はビールを煽った。

コンガリと焼けた玉ネギやナス、ピーマン、ジャガイモを大皿に載せ、最後に肉汁が滴るTボーンステーキが焼き上がり、あたしと俊朗はテーブルに着いた。

あたしと俊朗はお互いに向き合ってニヤツとしてから、ステーキに手を付けた。

「うわ、美味しい！」

「だろ。僕のバーベキュー歴は伊達じゃないんだから」

俊朗は嬉しそうだった。

「お見事です、はい」

あたしは美味しくてTボーンステーキをすぐに平らげてしまった。
「もう一枚食べるかい？」

あたしはうなずいて、皿を俊朗に差し出した。俊朗はトングでTボーンステーキを載せてくれた。付け合せの焼き野菜はマリネードを、生野菜はドレッシングを掛けて食べた。どれも美味しかった。自然の中で食べるのは初めてだったが、こんなに美味しいとは思わなかった。

炭も白い灰ばかりになって、バーベキューピットには肉が無くなり、焼き野菜も無くなり、サラダも無くなってしまった。

「良く食べたね。満腹になったかい？」

そう言って俊朗は、最後になった缶ビールの栓を開けた。

「もうお腹いっぱい。これ以上は食べられないわ」

あたしはそう言って、水着のちよつとふくれたお腹をさすった。

「せっかくのセクシー水着が、そのお腹じゃ台無しだな」

俊朗はクッククックと笑った。

「もう、イジワルなんだから！」

そう言つとあたしは、羽織っていたジャンパーを脱ぎ捨ててポージングをして俊朗に見せ付けた。

「ホラ見てよ！ 全然大丈夫でしょ！」

俊朗は、ジーツとあたしを見ていた。

「どうしたの？」

そう言いながら、あたしは俊朗に近づいた。俊朗はあたしを見詰めたままジーツとしていた。

あたしは有無を言わずに俊朗にキスをした。そして俊朗の手を取ってあたしの胸に持っていった。

「あたしを抱いて。あたしのことが好きなら。ねえ、お願い」

あたしは水着のホルターの紐を解いた。それからバックの紐も解いた。するとあたしの胸が露わになった。俊朗は、あたしの胸を見て静かに言った。

「遼子、キレイだよ。とっても綺麗だ」

そして、あたしを抱き締めてくれた。そして長い時間、あたしと俊朗は唇を重ね合わせた。唇を離すと俊朗はあたしをお姫様抱っこをして部屋の中へと運び、畳の上にあたしを寝そべらした。

「遼子が欲しい」

そう言って俊朗は、あたしの身体を貪り始めた。

あたしは嬉しかった。

そこには優しいけれど激しい愛があった。

だからあたしは痛みを我慢して『女』になったのだった。

07 Alone Again

夏も半分が過ぎ、テレビでは終戦の特集が多くなった頃、あたしは俊朗と盆踊りに行くことにした。

あたしは、黒地に青い花の浴衣に紫の四寸帯で、髪の毛はアップにして青色のコサージュを着けた。そして、俊朗は紺色のストライプの甚平を着て待ち合わせをした。

俊朗は少し顔色が冴えない様子だった。

「どうしたの？ 大丈夫？」

あたしはそう訊くと大丈夫と俊朗は答える。けれども、どう見たって俊朗は無理矢理にでも笑っている感じに見えた。それでも俊朗は団扇で扇ぎながら、あたしと手をつないで、夜店の中を歩いたのだった。

金魚すくい、綿菓子、リンゴ飴、チョコバナナ、お好み焼、焼きそば、たこ焼き、カステラ、お面、射的、くじ引き、スマートボール、輪投げ。

まずは、たこ焼きで腹ごしらえをした。珍しく醤油味のたこ焼きで美味しかった。次は金魚すくい。あたしと俊朗、二人でやったけど二人ともすくえなくてモナ力は撃沈。お店のおじさんにオマケしてもらって、二匹を袋の中に入れてもらった。カステラを摘みながら、くじ引きで当たった小さなピストルを構えたりして、櫓がある盆踊りの会場までやってきた。

あたしと俊朗は、明らかに地元の踊りの会に入ってますという人の後ろで、見様見真似で踊った。同じ動作の繰り返しがあつて、なかなか上手く踊れるようになった。

その時だった。

俊朗に男の人と女の人が話し掛けてきたのだ。

「あなた、うちの娘をどうするつもりですか！」

「いい歳して、娘を誘惑しないでください！」

激しい口調で、俊朗に話し掛けたのは、あたしの両親だった。

「父さん、母さん、こんなところで何してんの！」

あたしがそう言うと、母親の百合はあたしに激しく言い返した。

「遼子、あなたこそこんなところで何をやっているの！」

父親の秀行も、今日ばかりは完全な父親の顔だった。

「あなたは誰なんです！ あたしの娘を誘惑して！ 訴えますよ！」
「うちの娘をどうするおつもりなの！」

両親の厳しい言い方に、あたしも反論した。

「このヒトは、あたしの恋人なの！ 恋愛は自由じゃないの、父さん？ 父さんだって何をしてるの！」

父親の秀行は、益々顔を真っ赤にして怒鳴った。

「それとこれとは話が別だ！ 今はお前のことを言っているんだ」
母親の百合も負けてなかった。

「こんなおじさんが恋人だなんて！ 母親のあたしは許しませんからね！ ええ、絶対にね！」

あたしはもう泣き出しそうだった。

その時、俊朗はあたしの両親に対して深く頭を下げたのだった。そしてゆっくりと静かに言葉を吐いた。

「申し訳ありませんでした。僕の不徳の致ところです。面目ありません。素直に謝ります」

あたしの両親は、俊朗のその態度に肩透かしを喰らったようでポカンとしていた。

一番シヨックだったのはあたしだった。俊朗がそんなことを言うなんて。

「ねえ、それ、嘘でしょ？ あたしのこと、愛してるんでしょ？ 違うの？」

あたしは、俊朗にすがって揺り動かして訊いた。しかし、俊朗は頭を下げたまま、ビクとも動かなかった。

やがて俊朗は頭を上げて、あたしの両親に言った。

「すみませんでした。これ以降今から、もう娘さんには近づきませ

ん。連絡も取りません。それで勘弁していただきますよう」

言い終わると、俊朗は回れ右をしてその場から立ち去って行った。
「それ、どういうことなの！ 俊朗さん、待ってよ！ 待ってたら
！」

あたしは俊朗に追いつくがろうとしたら、父親の秀行と母親の百合
に腕を掴まれて身動きが取れなかった。

「放してよ、ねえ、どういうこと！ こんな嫌だよ！」

あたしは地団駄を踏んで、大粒の涙がこぼれた。

「嫌よ、こんなの！ 絶対に嫌よーっ！」

俊朗は全く振り返りもせず歩き続け、雑踏の中へと消えて行った。
「遼子、あなたは今年大学受験なのよ。ちゃんと勉強してもらわ
ないと困るわ」

「そうだよ、今が一番大切な時なんだ。恋なんかに現を抜かしてい
る場合じゃないんだ。ましてや、あんなおじさんとの恋なんて絶対
に許さんから」

両親はあたしをなだめすかすのに必死のようだったが、あたし
にはその言葉は聞こえていなかった。あたしが一番ショックだった
のは、俊朗があんなに簡単に身を引いたことだった。

あたしはガツクリと肩を落として、その場で泣き崩れてしまった
のだった。

08 First Finale

夏休みが終わって九月になった。

あの盆踊りの日から、幾度と無く俊朗に連絡をしたが、携帯電話は全くつながらなかった。メールも無しの礫だった。全くの音信不通。あたしは気が抜けたように腑抜けになった。ただ何か釈然としない想いだけがあたしの中を駆け巡るだけだった。

「そう。ひと夏の恋だったのね」

「大変な思いをしたんだ」

恵梨佳と茉美はそう言ってあたしを慰めてくれた。

その後の半年、あたしはひたすらに受験勉強に打ち込んだ。そして何とか志望する大学に滑り込んだ。

その頃だった。

あたしの携帯電話が鳴ったのは。

相手は「大村 俊朗」の電話番号だった。

あたしは慌てて電話に出た。

「はい、遼子です。俊朗さん？」

残念だったが、電話をしてきた主は女性の声だった。

「咲田 遼子さんですね？」

あたしの声のトーンは一気に下がった。

「ええ、そうですけど」

「私は、大村 顕子と言います。俊朗の娘です」

あたしはビックリした。

それと同時に疑問が湧いてきた。なんで娘さんが俊朗の携帯電話で電話してるんだろうと。

「父は、先月亡くなりました」

あたしは頭が真っ白になった。

なんで？

どうして？

その疑問に、大村 顕子はすぐに答えてくれた。

「貴女とお付き合いまする前から癌を患っていました。貴女とお付き合いまするちよつと前に『余命一年』と宣告されていたようです」

あたしは呆然として、娘さんの話を聞いていた。

「昨年のお盆前からかなり調子が悪くなりまして。それでたぶん、貴女との関係を断ち切ったようです」

俊朗にそんな事情があるとは、あたしは全然知らなかった。

「でも、貴女との関係を断ち切ったことが一番堪えたようで、その後の経過は悪化の一途でした」

あたしの顔には、行く筋もの涙が頬を伝っていた。

「最後まで貴女のことを気に掛けていました」

あたしは既に嗚咽を始めていた。

「父のために泣いてくれるのですか？ ありがたいことです」

あたしはもう泣き崩れていた。

「大丈夫ですか？ これから大事な話をしますけど、いいですか？」

あたしは少しでも正気になろうと涙と鼻水を拭った。

「はい、大丈夫です」

それを言うのが精一杯だったけれど。

「実は、父が貴女に『形見分け』をしたのです。受け取っていただけるでしょうか？」

あたしは、それを受け取ってからすぐに車の運転免許を取得して、黒のワゴン車を買った。

そして、あたしは四時間の長距離ドライブの後、林の中を進んでいた。

朽ち掛けた看板で脇道を逸れてその先まで進んだ。

そこは、俊朗が連れて来てくれた別荘だった。

あたしと俊朗が愛し合った別荘。

そして、あたしが女になったところ。

黒のワゴン車を停めて、あたしは車から降りた。

あたしは、自然に溢れ出る涙を止めることは出来なかった。
春の別荘は花が咲き乱れて、とても綺麗だった。

08 First Finale（後書き）

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

久しぶりに書いた「女子とおじさん」がテーマのプラトニックラブな作品。今回はちよつとエツチな描写も入れてみました。

「第五回『夏祭り』競作小説企画」に参加させていただいた作品。企画の趣旨から外れていないことを切に願いながら、企画サイトにはもつと素敵な作品が目白押しですので、そちらもお読みいただけたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8174v/>

Your heart is marine blue

2011年8月16日03時11分発行